

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

From 'minxi' to Ethnic Group : Paradigm Shift on Hakka Studies since 1990s

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5589

「民系」から「族群」へ

—1990年代以降の客家研究におけるパラダイム転換—

From 'minxi' to Ethnic Group: Paradigm Shift on Hakka Studies since 1990s

河合 洋尚

KAWAI Hironao

はじめに

客家は、中国⁽¹⁾南部をはじめ世界各地の華人社会に広く分布する、漢族の下位集団である。彼／彼女らは、広東省、福建省、江西省の省境にある山岳地帯（以下、交界区と称する）に集住しているだけでなく、香港、台湾、および東南アジア諸国、インド、モーリシャスなどの華人社会で一定の勢力を形成している。

客家の歴史、言語、文化が研究者の関心を引くようになったのは、19世紀以降のことであった。客家の研究がいつから始まったかについては諸説があるものの⁽²⁾、少なくとも19世紀後半から、欧米の宣教師により記録と考察がおこなわれてきたことは、大勢の学者が認めるところのものである。宣教師たちは、特に香港や広東省において客家への宣教活動と学術研究を実施し、客家が、①中原⁽³⁾にルーツをもつ正統な漢族であること、②それゆえ中原漢族の言語や文化をより良く保存していることを、早くから主張した〔飯島 2007；Kawai 2011：52-54〕。

こうした見解は、20世紀前半になると中国人研究者による客家論の前提として受け入れられ、特に中国客家学の祖である羅香林によって体系化された。羅は、族譜や伝承の検討を通し、①客家が中原から五度の大きな移動を通して中国南部に移住したこと、②それゆえ客家には中原の言語や文化が保存されていることを論じた〔羅 1992 (1933)〕。羅の見解は基本的には宣教師のそれを継承したものであったが、なかでも後の客家研究者に大きな影響を与えたのが、氏の提示した「民系」という概念である。

「民系」は、羅香林が1930年代に提唱してから半世紀以上にもわたって客家研究の主要な概念になってきたし、今でも中華圏では一定の影響をもっている。だが、その一方で、1990年代になると「民系」概念への反省と批判がおこなわれるようになり、それに代わる概念として、「族群」(ethnic group)が世界の客家研究において注目され始めた。それでは、ここ20年の客家研究で着目されるようになった「族群」の研究とは、一体どのようなものなのであろうか。本稿では、この問いに対して二つの段階を踏んで回答を与えていく。まず初めに、第I章で、戦後日本の研究から始まり、特に1990年代中葉から「民系」研究のパラダイムに対し疑問が提示されていく動向をまとめる。次に、後半(第II章)で歴史学と人類学における客家の「族群」論への関心の高まりを述べる。それを踏まえて、最後に結論部で、今後の課題について論じることにしたい。

I 「民系」パラダイムの継承と批判

1. 羅香林の「民系」研究とその継承

本題に入る前に、まず羅香林の「民系」論とその影響について、今一度検討しておきたい。それにより、1990年代以前から徐々にその議論が疑われていくプロセスを概観することになるからである。

羅香林は、1906年に広東省梅州市興寧県で生まれ、地元の高校を卒業後、1926年に北京の清華大学に入り歴史学と人類学を学んだ。その後、燕京大学、広州の中山大学と渡り歩き、1933年に中山大学図書館の秘書をしていた時、客家研究の古典として知られる『客家研究導論』を出版した。そして、彼は、1950年に『客家源流考』を出版し、「民系」の概念について理論的な考察を深めた。

羅香林によれば、「民系」とは、漢族が中原から中国各地への移動にもなつて分裂・形成した、漢族の下位集団である。羅は、客家もまた中原にルーツをもつ漢族の下位集団であると規定したうえで、主に次の二つの観点から、「民系」としての客家を説明した。第一に、客家は、千年以上も前から連綿と続く中原漢族の末裔であり、中原の言語・文化・パーソナリティを継承しているとす。第二に、客家は、移住先の民族的、自然的状況に順応して分化・形成された、独自の（すなわち他集団とは異なる）特徴をもつ集団であるという。これらの二つの軸は、羅香林が「民系」としての客家を主張するうえでの、前提となってきた⁽⁴⁾。

こうした「民系」論を基盤とした研究は、日本においても中華圏においても枚挙に暇がないが、なかでも羅香林の議論を継承・発展させた研究として影響力をもったのが、台湾の陳運棟が1978年に出版した『客家人』である。陳運棟は、やはり千年以上も前に中原から南下した漢族の末裔であると客家について考えており、羅香林の論を発展させて、中原から中国南部、そして台湾への移住ルートを描き出した〔陳運棟 1983 (1978) : 44-64, 95-98〕。さらに、陳運棟は、客家文化についても、中原文化の一系統であることと、地元的生活文化と結合した独自の特色をもつことを条件として挙げ、具体例でもってそれを主張した〔陳運棟 1983 (1978)〕。

中国では、文化大革命が収束して、改革・開放政策が採択された後の1980年代から客家研究が再興したが、1990年代まで羅香林や陳運棟に代表される「民系」パラダイムはほとんど疑われることなく受け入れられていた。特に中華圏では、客家の血縁や文化を純粹に中原と結び付け、客家を中原の「生きた化石」とする議論もまた、当時の客家研究では影響力をもっていたのだという〔夏 2012〕。こうした「民系」パラダイムは、後述するように1990年代末からの「族群」パラダイムの台頭によって減退し始めるものの、他方で中国や多くの華人社会では、今や政治的な正当性を獲得するに至っている。例えば、梅州市の中国客家博物館では、①中原から五度の大きな移動を通して南下した歴史、及び、②特色ある地元的生活文化を、客家展示の概念基盤としている。また、大多数の概説書もこうした「定説」に従っている。

2. 中川学による「民系」論への懐疑

「民系」パラダイムは、1930年代以降、日本でも受け継がれており〔河合 2011〕、戦後の橋本万太郎や中川学の客家研究における前提となっていた。とりわけ戦後の日本客家研究をリードしてきた歴史学者・中川学は、「客家研究というと羅香林の大作『客家研究導論』を入門教材とする方法が一種の常識である」〔中川 1977 : 435〕と述べているように、羅香林の「民系」論を研究の出発点としてきたことで知られる。その概念枠組みのもと、中川は客家が千年以上にもわたって中原から南下した歴史を検討しており、特に唐代の主客制度により出現した「客戸」と呼ばれる流動人口

と客家との関係について、1960年代から議論している〔中川 1964、1973、1974〕。だが、他方で、客家のルーツを中原に求める羅香林の説を、中川が徐々に疑うようになったことは興味深い。

中川は、1970年代より羅香林の歴史認識と距離を置く発言を始め、それは1980年に出版された『現代客家論の構図』において、「真実」と「事実」という対立概念により論理的に示された。中川によれば、客家のルーツが中原にあるとする羅香林らの見解は、各資料から論証するに史実ではない。彼は、族譜の再検討を通して、客家のルーツを淮河の南岸としており、さらには江西省や湖南省の鉱山労働者であった可能性も示唆していた〔中川 1980：82-83〕。その意味で、中川は、客家の血縁を中原に求める羅香林の説明体系は、「事実」ではなく、彼自身の主観的な過去の認識であると一蹴している〔中川 1977：438〕。ただし、中川は、だからといって客家のルーツを中原に求める彼の説明体系をまったく否定していたわけではない。彼は、羅香林のいう過去の認識が世界の客家たちの心のなかで「真実」となっていることを日本客家華僑の事例をあげながら説明し、それが客家の現実世界を構成する重要な要素となっていることを指摘した〔中川 1980：2-4〕。

このように、中川は、1990年代より以前に、「民系」パラダイムの軸の一つを構成する中原起源の歴史認識（以下、中原起源論と称する）を疑っていた。また、次章で詳しく述べるように、1980年代以降になると、人類学者の周達生や瀬川昌久が「民系」パラダイムのもう一つの軸、すなわち客家の固有文化を脱構築する議論を展開するようになる⁽⁵⁾。中川の議論から始まり、1980年代の日本では、すでに「民系」パラダイムへの懐疑が始まっていたことが分かる。

3. 1990年代の中国における「民系」批判

以上にみる中川らによる「民系」懐疑論は、世界的に見ても先駆的であったと考えられるが、これらが中華圏や北米において紹介されることは少なかった。これらの地域で「民系」パラダイムへの反論が開始されたのは1990年代のことであり、その代表的な論者となったのは房学嘉、謝重光、陳支平ら中国出身の学者であった。

なかでも、嘉応大学客家研究所の房学嘉が1994年に出版した『客家源流探奥』は、当時としては過激な議論を含んでいたため、多大な反響を引き起こした。房は、考古学資料や歴史資料などを駆使して、客家のルーツは中原ではなく、土着にあると主張した。房によると、客家のベースは古百越族（中国南部の先住民）であり、中原から移住してきた少数の漢族と大勢の古百越族とが融合することにより、客家が誕生したのだという〔房 1996〕。さらに、房は、客家のDNAが北方漢族よりも南方漢族に近いとする遺伝子学のデータを持ち出し、文化は別にしても、血縁のうえで客家は土着の先住民族に起源すると論じた⁽⁶⁾。

房学嘉の以上の議論は、土着起源説と呼ばれ、それまでの中原起源説を根底から覆すものとなった。房がこの持論を提示した1990年代当時、土着起源論は多くの客家学者に受け入れられなかっただけでなく、それが客家のプライドを傷つける議論であったため感情的な批判を浴びせられたと聞く。だが、房の土着起源論は、それまでの客家起源論を再考させ、さまざまな議論を呼び起こす契機となった。例えば、福建社会科学院の謝重光は、客家の主体が古百越族であるとする房の主張は今後の論証を待たねばならないと、慎重ではあるが、客家のルーツの一つを中国南部の先住民に求める議論を展開してきた〔謝 1995、2008〕⁽⁷⁾。

他方で、アモイ大学歴史学部の陳支平が1997年に出版した『客家源流新論』は、客家のルーツが土着か否かについては述べていないが、中原にルーツをもつのが客家だけでないとし、別の角度から「民系」パラダイムへの懐疑を論じた。陳支平によると、多くの客家宗族と非客家宗族は、族譜の記載において同じ祖先をもっており、それゆえ客家特有の移住ルートを探し出すのは困難なのだという。ここから陳支平は、なぜ客家だけが独特の集団として差異化されるのか、そのアイデン

ティティの形成過程を検討していくべきだと主張した〔陳支平 1997〕。陳のこの議論は、それまでの「民系」パラダイムに対して反省を促すだけでなく、次章にみる「族群」論への橋渡しとなる先駆的業績としても注目できる。

Ⅱ 「族群」パラダイムへの転換

1. 「族群」の概念と台湾における使用

このように、1990年代には、客家が中原から千年以上の時をかけて南下したという「民系」論の前提が、中国においても疑われるようになった。そして、この動きに歩調を合わせるかのように、1990年代から「族群」をめぐる議論が世界の客家研究で台頭するようになった。

「族群」とはエスニック集団のことであり、この概念は通常、出自、言語、文化、アイデンティティを共有する集団を指す。ただし、近年の客家研究（さらには近年の歴史学や人類学）において、「族群」は、ただ単に一定のまとまりのある集団を指すにとどまることはない。客家の「族群」論においては、それを太古の昔から連続と続くア・プリオリな存在ではなく、近代以降の社会条件下において構築された存在として捉える傾向にある。言うまでもなく、「民系」概念は、客家を千年以上にもわたって実在してきた特色ある集団とみなしてきたという点で、本質主義的な性質を帯びてきた。それに対して、「族群」をめぐる議論は、むしろ客家が明・清以降の社会条件下において構築されてきた集団と捉える傾向があり、その意味で構築主義的なアプローチを基盤としている。また、近年の客家研究で展開されている「族群」の議論は、とりわけアイデンティティの形成過程を主要な論点としており、住民の内面に立ち入って、彼／彼女らがいかに客家としてのアイデンティティを獲得していくかに焦点を当てている。したがって、近年の客家研究における「族群」概念には、単なるエスニック集団以上の意味が含まれていることが分かるであろう（本稿では、こうした価値付与的なエスニック集団を「族群」と漢字で表す）⁽⁸⁾。

「族群」という概念は、管見の限り、1990年代前半の台湾においてすでに存在していた。特に中央研究院の徐正光が編纂した『徘徊於族群和現実之間』では、1991年という早い段階に「族群」の概念が提示されており、台湾客家のアイデンティティをめぐる議論を展開している。この本は、基本的に羅香林の中原起源説を引きずっているが、1989年に台湾で起きた客家民主化運動（俗に「還我客語運動」という）の影響を受け、客家の自己意識に言及し始めている。台湾では、1980年代にはすでに「族群」概念が使われており、1990年代には社会・政治分野のキーワードとなった〔王 2003〕。客家研究においても、「族群」の概念は、台湾や香港の学者により1990年代以降に広められるようになり、それは後に中国の客家研究者にも知られる概念となった〔庄・高 2009〕。

ただし、台湾における初期の「族群」の議論は、台湾内部において客家のアイデンティティや存在意義を見つめ直し、福佬（台湾漢族のマジョリティ）や原住民と並ぶ政治的地位を獲得することに主眼が置かれていた。したがって、1990年代の段階では、福佬、原住民に対する客家の位置づけを論じる傾向が強く、近現代において客家が新たに構築されていく具体的なプロセスについて目立った議論がなされなかった⁽⁹⁾。この方面の研究は、1990年代後半のオーストラリア、アメリカ、日本などでまず先駆的な議論がなされ、後に台湾や中国の一部の研究者に影響を与えるようになったといえる。それでは、「族群」としての客家は、明・清以降の社会状況において、どのように構築されたと考えられるようになったのだろうか。以下、歴史学の議論を取りあげることしよう。

2. 歴史学による「族群」論の展開

先述の通り、「族群」をめぐる議論は1990年代後半から世界的に台頭しているが、先駆的な議論を展開した一人が、オーストラリアの華人学者・梁肇庭 (Sow-Theng Leong) である。梁肇庭は、スキナーのマクロリージョン・モデルを援用し、客家が自己意識を備えた「族群」として形成されてきた歴史的過程を論じた。彼はまず、明・清代の区域経済と環境変化を解析し、客家先民 (客家が形成される前段階の集団) の移住経路を検討した。スキナーのマクロリージョン・モデルによると、中国南部の主要な経済区域は、長江、東南沿海、嶺南の各リージョンに区分されるが、梁は、その三つのリージョンの外側に形成された区域、すなわち交界区に移動したのが客家先民であると考えた。当時中国南部の中心地であった三つのリージョンは新たな機会を求める周辺地区の移民を吸収するが、逆にその経済が衰退した際には、移民はリージョンの外へと流れていく。梁肇庭は、こうした移民の流れによって異なった集団が衝突することにより、交界区において客家アイデンティティが覚醒してきた過程について考察した [Leong 1997]。

こうした区域経済論は、ここ数年、中川学の弟子筋にあたる蔡驍と飯島典子によっても探求されている。蔡と飯島の研究については、本誌第4号で紹介・論評されているので [甘利 2007: 99-105]、ここでは要点を三点記すことにしたい。

第一に、蔡驍は、梁肇庭と同様にスキナーのモデルを借用し、鉱業や交易を通して汀江流域 (福建省西部) で一つの区域経済が形成されたこと、また、それにより汀州語という共通言語がここでつくりだされたことを指摘した [蔡 2005: 70, 212]。蔡驍は、この汀州語を客家語のプレ言語とみなしており、この言語を母体とする人々が清代に広州、スワトウ、上海などの大都市、および海外の華人社会に移住するにつれて、客家としてのアイデンティティを覚醒させていったのだと述べている [蔡 2005]。

第二に、飯島は、福建省西部や広東省東北部・北部にて鉱山資源が豊富であったことに着目し、鉱業の衰退によって多くの労働者が無頼者や天地会のメンバーとなり、広東省中部などに流入していった過程を論じた [飯島 2007: 150-160]。ただし、飯島は「族群」の形成に関しては19世紀に見ており、特に西洋の宣教師が客家を名づけていった側面に着目した [飯島 2007: 62-66]。

第三に、飯島はさらに、客家アイデンティティの喚起が東南アジアの華人社会や香港などの「外部」で先に起こったとみなしており、後に広東省東北部など、中国の「内部」にフィードバックされていったのだと論じた [飯島 2007: 218-221, 229]。そのなかで飯島が特に着目した現象の一つが、清末から民国期にかけて客家エリートが中原漢族としての身分を主張し始めた、一連の自己主張運動であった [飯島 2007: 200-201]。

清末から民国期にかけての客家アイデンティティの覚醒については、近年、中国歴史学の華南学派を中心に中国の学者も注目している。華南学派とは、香港中文大学、香港科技大学、中山大学、アモイ大学を中心とする華南各地の歴史学者により構成されるグループを指す。華南学派による客家の「族群」研究はそのうち中山大学歴史学部のスタッフを起点に展開されてきたが、特に大きな影響を与えたのが同学部の程美宝であろう。オクスフォード大学で博士号を取得した程は、「言説権」という概念を使い、清末から民国期に至る客家エリート自己主張運動をさらに詳細に議論した。程によれば、広東省において諸集団を描く権利 (すなわち言説権) は、清末まで本地人に委ねられてきた。それゆえ、客家など他の諸集団は、野蛮で文化に欠ける集団と、長らくみなされてきた。しかし、程の指摘によると、清末から民国期にかけて客家内部から文人や官僚が現れるにつれ、本地人が一方的に言説権を握る以上の状況は変化していった [程 2006: 67]。とりわけ、中華ナショナリズムが高揚したこの時期、言説権を得るようになった客家は、自らが中原にルーツをもつ漢人

であることを学術的に正当化し、主張していったというのである。彼女によると、学術を武器に客家の歴史を再構築していった代表人物こそが、上述の羅香林であった〔程 2001、2006〕。

他方で、同学部の教授である陳春声は、広東省東部のスワトウに着目し、民国期のスワトウで潮州語話者と梅州語話者が接触することにより、後者に客家としてのアイデンティティが芽生えていった過程を論じた〔陳 2006〕。また、贛南師範大学の温春香は、雑誌『逸経』13号（1936年）をめぐる抗議事件をとりあげ、この雑誌で客家が少数民族と記載されたことが、インドネシアに居住する梅州籍客家の抗議を招いた過程を論じた〔温 2009：4〕。温春香の研究は、民国期の客家自己主張運動において、東南アジア華人の参与もあったことを示している。

清末から民国期にかけての客家アイデンティティの覚醒をめぐる論考は、このように広東省、香港、東南アジアの華人社会を中心に描かれている⁽¹⁰⁾。また、広西省の客家アイデンティティ形成については、菊池秀明が、太平天国の乱との関連で1998年という早い時期に議論している〔菊池 1998〕。しかし、その一方で、交界区の主要な部分を占める福建省西部と江西省南部、ならびに四川省など中国の他地域における同時期の研究は、いまだに着手されていない。この傾向は、台湾の研究にも見られ、台湾客家の「族群」研究におけるアイデンティティの覚醒については、むしろ1980年代以降を中心に議論されている〔Martin 1996；河村 2005；黄 2006；田上 2007〕。

3. 人類学による「族群」論の展開

「族群」としての客家への関心は、歴史学にとどまらず、人類学においても1990年代より興隆している。人類学者が関心を寄せてきたのは、特に客家の文化とアイデンティティについてであり、この両者から「族群」としての客家の形成過程が論じられるようになっていく。

繰り返すと、「民系」の概念には二つの軸があり、その一つが客家特有の文化やパーソナリティを認めるものであった。しかし、1982年になると国立民族学博物館の名譽教授である周達生〔1982〕が、論文「客家文化考」で、客家特有の文化がどこまで存在するか再検討しはじめた。続いて、東北大学の瀬川昌久は、1993年に出版した『客家——華南漢族のエスニシティとその境界』で、客家の文化とアイデンティティを固定的に捉えるそれまでの議論を批判し、動態的な視野を提示した。瀬川の議論以降、人類学者も客家の「族群」形成について関心を払うようになっていくが、ここ20年の動向を整理すると、主に二つのアプローチが展開されてきたと筆者は考える。

その一つ目は、状況論的アプローチであり、瀬川昌久によって、早くも1980年代後半より着手されている。瀬川は、1980年代に香港新界で収集したフィールド・データをもとに、その本地人と客家の間のアイデンティティが、状況に応じて変わりやすいことを指摘した〔瀬川 1986〕。瀬川によると、古くから新界に住む本地人と新参の客家とのアイデンティティは、時代や状況によって転換しうる。例えば、新界の主要な宗族の一つである彭氏は、今でこそ典型的な本地人であるとみなされているが、その移住ルートは客家のそれと一致しており、祖先は客家であるとする伝承も残っているという。また、同じく新界の主要な宗族の一つである鄧氏は、同じ一族であっても移住先の状況に応じて本地人になったり客家になったりする〔瀬川 1993〕。これらの事例から、瀬川は、客家のアイデンティティが、その場その場の状況に応じて変動しうるという、動態的な視点を提示した。

こうした状況論的アプローチは、ニコール・コンスタブルが1996年に編纂した『客人——中国内外の客家アイデンティティ』において、さらに広範な地域を対象として議論している〔Constable ed. 1996〕。この編著では、客家がどのような社会状況下で客家アイデンティティを抱くのか／抱かないのかが、香港、台湾、およびマレーシアとインドの華人社会を例に議論されている。例えば、エリザベス・ジョンソンは、香港九龍の村において客家が本地人に転換した状況について論じた〔Johnson 1996〕⁽¹¹⁾。客家であるか否かよりも本地人であるか否かが重要になっている実態につ

いては、マレーシア華人社会の例でも報告されている [Carstens 1996]。他方で、エレン・オクスフェルドは、カルカットに住む客家が、ベンガル人などの他集団との接触を通して、強烈的な客家アイデンティティを抱くようになっていくと論じた。しかし、オクスフェルドによると、彼／彼女が、カナダへの移民後、環境の変化に応じて客家としての自意識を失っている事例をあげ、客家アイデンティティの盛衰は特定の社会状況に左右されると主張した [Oxford 1996]。

状況論的アプローチは、日米だけでなく、21世紀初頭には、中山大学人類学部および嘉応大学客家研究所の教員により、中国でも導入されている。彼らはいずれも梅州市の南部にある豊順県において調査をおこない、ここの住民が客家としてのアイデンティティと潮州人としてのアイデンティティを相互転換させていることに着目した [周建新 2000; 周大鳴 2005, etc.]。

ただし、状況論的アプローチは、ミクロな視点からのアイデンティティの動態性を論じることには長けているが、「族群」としての客家が、よりマクロな文化政策や商業行為によって近年創出されている側面を、十分に論じてこなかった。すでに明らかにされているように、清末から民国期にかけて客家アイデンティティは確かに高揚したが、それは一部のエリートに担われていた動きであり、地域的にも広東省、香港、東南アジアの華人社会などの一部に限られていた。例えば、現在の中国で客家地域とみなされている所の大半の住民は、1980年代に入るまで、自らが客家であることを知らなかった [Erbaugh 1996; 劉 2001]。清末から民国期の近代中国における客家の「族群」形成に比べ、1980年代以降の現代中国におけるそれは、地理的により広範であり、また民間社会まで深く浸透するものであったのである [Kawai 2011]。

こうした状況を鑑みて、近年の日本では、再生アプローチを、続けて展開するようになっていく。「再生」は「創生」との対置によって成り立つ概念である。すなわち、「創生」は清末から民国期にかけて客家の「族群」形成がなされた過程を指し、他方で、「再生」はここ30年の現代中国において「族群」としての客家が民間レベルまで広く浸透するようになった過程を指す。そのうち、「再生」への人類学的アプローチは、以下の三点の過程を分析対象として、ここ5年ほどの間、研究が進められている。

- (1) 客家の「再生」は、一部の知識人とどまらず、地方政府、マス・メディア、開発業者、観光業者、商店経営者、宗族など、さまざまな主体により担われている。彼らが客家を利用する目的は、主に利潤獲得であり、客家を人的、地域的な特色とすることで経済発展の促進を目論む [河合 2010; Kawai 2011]。
- (2) そのような目的を達成するために、客家地域を政治的に確定し、そこにあるヒトや特色ある物質・民俗（シニフィアン）と客家（シニフィエ）を結びつけて記号化する [河合 2007、2010; 小林 2009、2011]。そして、こうした記号の連鎖をつくりだすことで、一種の客家共同体——シュミラークルをつくりだす。また、その視覚化を通して、客家アイデンティティを民間社会において喚起し、より広範かつ深いレベルで「族群」としての客家を形成する [河合 2010]。
- (3) 客家の記号化は、しばしば香港、台湾、東南アジアの華人社会などの「外部」でなされ、中国にフィードバックされる。例えば、特色ある建築物（土楼や厝屋など）を中原文化（祖先崇拜、伝統中軸線、天人合一、風水など）と結びつけて客家のものとする作業は、しばしば台湾や東南アジアの華人社会で先になされ、それが逆輸入されてきた [小林 2009]。

以上の分析枠組みは、中国語や英語の論文で先に提示され、2010年には中国江西省の『贛南師範学院学報』において関連の特集が組まれた [飯島 2010; 河合 2010; 小林 2010; 金 2010]⁽¹²⁾。この特集で提示された視点は、中国や台湾においても、すでに新たな研究アプローチとして紹介されたり [董 2012]、客家文化産業の研究に導入されたりするようになっていく [張 2011]。ただし、

再創生アプローチは、2011年の段階では、対象地域が広東省、福建省、台湾などに限定されており、またテーマも建築や工芸品が主体であった。しかし、瀬川昌久と飯島典子の編集で『客家の創生と再創生——歴史と空間からの総合的検討』（2012年）が風響社から出版されたため、現在ではこのアプローチは、地域的にもテーマ的にも厚みを増している。

おわりに

以上、本稿は客家研究における「民系」パラダイムから「族群」パラダイムへの移行について、特に1990年代以降の動向を中心に整理してきた。本稿の説明からも分かるように、「族群」概念への注目は、国際的な流れとなっており、なかでも日本はその先駆的な役割の一翼を担っていた。現在、「族群」としての客家への注目は言語学やその他の領域では必ずしも向上していないものの、少なくとも歴史学や人類学では「族群」研究は客家研究の主流となりつつある。もっとも、中国や台湾では「民系」概念の影響力がいまだに消え去ってはいないが、筆者の知りうる限り、中国や台湾の第一線の研究者は、「民系」を古いパラダイムと考えるようになってきている。例えば、2011年11月に筆者が江西省の贛南師範大学で開かれた第一回客家文化高級論壇に参加した折にも、議論の中心は「族群」としての客家の歴史的／現代的構築にあった。中国や台湾の多くの学者が「民系」論の支持者であり、中原起源説の信者であるとする状況には、すでに変化が訪れている。

このように、各国の客家研究では「族群」への関心がますます高まっているが、以上のいくつかの議論は、必ずしも構築主義の理論的枠組みに収まっていたわけではないことを最後に付け加えておきたい。例えば、歴史学の関連の議論は、明・清以降の社会条件下で客家が構築される過程に焦点を当ててきたが、他方で、「客家先民」や「汀州語話者」のようなブレ集団を想定し、そこからの連続性を考慮してきた。その意味で、実際には、客家の構築性を極度に強調する議論を避けてきたといえる。また、人類学の諸議論では、羅香林らによるステレオタイプ的な客家像を脱構築したり、その政治経済的な利用形態を考察したりする論調が強まっているが、客家や客家文化の構築性を暴露することに研究の主眼が置かれてきたわけではない。瀬川 [2012:7] が指摘しているように、「客家」が創られる過程を比較検討することで、その創られ方の規則やメカニズムを読み解くことも重要視されているのである。その目的を達成するために、より豊富なフィールド・データを収集し、「族群」を超える新たなパラダイムを模索することが、今後の客家研究における課題となりうると考える。

注

- (1) 本稿では、便宜的に大陸中国 (mainland China) を中国と略称する。
- (2) 例えば、中国では惠州・豊湖書院の徐旭曾が1808年に著した「豊湖雜記」を最初の客家研究と位置付けることがある。この文章では、「客民」のルーツが中原にあること、その女性が勤労であることなどに早くから注目している。
- (3) 中原とは、古代中国王朝の所在地であり、現在の河南省とその近郊一帯を指す。ただし、中原の具体的な範囲については論者によって一致しておらず、場合によっては華北地方を広く指すことがある。ここでは、中原を、客家の思い描く想像上の北方地域と規定したい。
- (4) 例えば、羅は、客家の文化を説明する際、祖先崇拜や風水といった中原の遺風だけでなく、梅州市における地元習俗についても具体例を挙げて論じている [羅 1992 (1933)]。ちなみに、羅香林は客家特有の習俗を「文化」ではなく「文教」という概念で表現している。
- (5) 人類学者・渡邊欣雄もまた客家の文化的特色について疑っており、「客家」というと何かしらの特色として誤解されるため、「漢族」など別の語彙で代替してきたのだという。1980年代には日本の人類学者・民俗学者が客家地域の文化にまつわる報告を大量に出すようになるが、その多くの報告では、何

- が客家的なものとして現地でみなされているのかという「意識モデル」に触れることはあっても、客家の特色そのものについて明らかにしようとする研究はほとんど見当たらない。瀬川ほど直接的に述べてはいなくとも、少なからずの日本の人類学者が、すでに「民系」パラダイムと距離を置いていたと推測できる。
- (6) 房学嘉は、2007年9月29日に首都大学東京で講演をおこない、「土着起源論」についての近年の見解をまとめた。房のこの講演記録は、『民俗文化研究』第9号（2008年、民俗文化研究所）に小林宏至の訳で掲載されている。房は、ここでも血統のうえでのルーツを南方に求めている。ただし、他方で房は文化のうえでのルーツを中原に求める傾向にあり、彼は本質的な客家文化論に陥る傾向もある。
- (7) しかし、羅香林もまた「民系」の議論で中原漢族と先住民族との通婚を論じており、それにより客家という特殊な「民系」が成立したと考えている。謝重光は、土着起源論を避けて中原と土着の融合を唱えているが、彼の議論は、羅香林のいう「民系」論に後退する危険性を秘めている。
- (8) こうした「族群」モデルは、言うまでもなく、バルトのエスニック・バウンダリー論を起点にしている。中国研究における同様の議論は、ステファン・ハレル [2006] が彝族を事例に論じている。高山陽子による翻訳があるので、そちらを参照されたい。
- (9) ただし、台湾の客家研究はここ数年間、グローバル化や文化産業のなかの客家「族群」に着目しており、いくつかの優れた業績が出されている。これらの議論については、日本や中国ではまだ馴染みのないものが多いので、後の機会に稿を改めて紹介することにしたい。
- (10) 香港の事例については、飯島 [2007: 251-253] が香港崇正総会の成立をめぐる検討している。
- (11) 同書においてコンスタブルは、同じ香港であっても新界の崇謙堂村においては強烈な客家アイデンティティがあると述べている。その理由として彼女はここがキリスト教の村落であることを挙げ、中国人としての正当な儀礼をおこなわない代わりに、正当な中原漢族である客家としてのアイデンティティを主張しているのだという [Constable 1994, 1996]。
- (12) この特集の主題はもともと「客家の創生と再創生」であったが、編集の都合上、削除された。だが実質上、この特集は、再創生成アプローチを体系的に提示したものとなっている。

引用・参考文献

日本語文献

- 甘利弘樹 (2007) 「書評 客家史研究の展望——最近刊行された二書の書評を通して」『華僑華人研究』4: 99-105。
- 飯島典子 (2007) 『近代客家社会の形成——「他称」と「自称」のはざままで』風響社。
- 夏遠鳴 (2012) 「客都の変遷」(河合洋尚訳)、瀬川昌久・飯島典子(編) (2012) 『客家の創生と再創生——歴史と空間からの総合的検討』風響社、51-76頁。
- 河合洋尚 (2007) 「客家風水の表象と実践知——広東省梅州市における囲籠屋の事例から」『社会人類学年報』33: 65-94。
- 河村裕之 (2005) 「台湾における客家の自己主張運動」『南島史学』65-66: 209-220。
- 菊池秀明 (1998) 『広西移民社会と太平天国』風響社。
- 蔡麟 (2005) 『汀江流域の地域文化と客家——漢族の多様性と一体性に関する一考察』風響社。
- 周達生 (1982) 「客家文化考」『国立民族学博物館研究報告』7-1: 58-138。
- 瀬川昌久 (1986) 「客家と本地」『民族学研究』51-2: 110-140。
- (1993) 『客家——華南漢族のエスニシティとその境界』風響社。
- (2010) 「中国、台湾、日本の学術書ならびに一般書における客家のイメージ形成過程に関する研究」『東北アジア研究』14: 97-121。
- (2012) 「序論」瀬川昌久・飯島典子(編) 『客家の創生と再創生——歴史と空間からの総合的検討』風響社、1-11頁。
- 田上智宜 (2007) 「『客人』から客家へ——エスニック・アイデンティティの形成と変容」『日本台湾学会報』9: 155-176。

- 中川学 (1964) 「唐代の逃戸、浮客、客戸に関する覚書」『一橋論叢』50-3 : 339-345。
 —— (1973) 「中国・東南アジアにおける客家の歴史的 position について」『一橋論叢』69-4 : 355-369。
 —— (1974) 「客家と客戸の史的連関」『一橋論叢』72-1 : 45-46。
 —— (1977) 「中国客家史研究の新動向」『一橋論叢』77-4 : 435-447。
 —— (1980) 『客家論の現代的構図』アジア政経学会。
 ハレル・S (2006) 『「イ族史」の歴史』(高山陽子訳)、瀬川昌久・西澤治彦(編)『文化人類学リーディングス』風響社、281-310頁。

英語文献

- Carstens, S. (1996) "Form and Content in Hakka Malaysian Culture," in N. Constable (ed.) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*, Seattle: University of Washington Press, pp.124-148.
 Constable, N. (1994) *Christian Souls and Chinese Spirits: A Hakka Community in Hong Kong*, Berkley: University of a California Press.
 —— (ed.) (1996) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*, University of Washington Press.
 Erbaugh, M. S. (1996) "Hakka in the People's Republic of China," in N. Constable (ed.) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*, Seattle: University of Washington Press, pp.196-231.
 Johnson, E. L. (1996) "Hakka Villager in a Hong Kong City," in N. Constable (ed.) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*, Seattle: University of Washington Press, pp.80-97.
 Kawai H. (2011) "The Making of the Hakka Culture: The Social Production of Space and Landscape in Global Era," *Asian Culture* (Singapore Society of Asian Studies), 35: 50-68.
 Leong, S. T. (1997) *Migration and Ethnicity in Chinese History: Hakkas, Pengmin, and Their Neighbors*. Stanford University Press.
 Martin, H. J. (1996) "The Hakka Ethnic Movement in Taiwan, 1986-1991" in N. Constable (ed.) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*. Seattle: University of Washington Press, pp.176-195.
 Oxfeld, E. (1996) "Still 'Guest People': The Production of Hakka Identity in Calcutta," in N. Constable (ed.) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*. Seattle: University of Washington Press, pp.149-175.

中文文献

- 陳春声 (2006) 「論1640-1940年韓江流域民衆『客家觀念』的演變」『客家研究輯刊』29 : 1-14。
 陳運棟 (1983) 『客家人』聯誼出版社 (原版: 1978年)。
 陳支平 (1997) 『客家源流新論』广西教育出版社。
 程美宝 (2001) 「地域文化与国家認同——晚清以来『廣東文化』觀的形成」楊念群(編)『空間・記憶・社会轉型』上海人民出版社、387-417頁。
 —— (2006) 『地域文化与国家認同——晚清以来『廣東文化』觀的形成』生活・讀書・新知三聯書店。
 董莉 (2012) 「客三角的生存戰略——客家研究綜述及散論」『江西科技学院学报』25 : 82-86。
 房学嘉 (1996) 『客家源流探奥』台北: 武陵出版社 (原版: 1994年)。
 飯島典子 (2010) 「台湾客家文化之創造和再創造——論客家文化的變遷」『贛南師範学院学报』31-2 : 10-13。
 河合洋尚 (2010) 「客家文化重考——全球時代下空間和景観的社会生産」『贛南師範学院学报』31-2 : 3-10。
 —— (2011) 「二戰前日本の客家民族理解研究」『<第12届広東民族学会研討会> 論文集』嘉應大学客家研究所。
 黃子堯 (2006) 『台湾客家運動——文化・權力与族群菁英』客家台湾文史工作室。
 金裕美 (2010) 「侗族与客家的綉花靴变化比較研究——以三江侗族自治县民族旅遊活動為背景」『贛南師範学院学报』31-2 : 21-25。
 劉鎮堯 (2001) 『「客家」——誤解的歴史、歴史的誤解』學術研究叢書。

研究動向

- 羅香林 (1989) 『客家源流考』 中国華僑出版社 (原文：1950年)。
—— (1992) 『客家研究導論』 上海文芸出版社 (原文：1933年)。
王甫昌 (2003) 『当代台湾社会的族群想像』 群学出版社。
温春香 (2009) 「誰是『畚』、誰是『客』——『逸經』之畚客問題討論」 『贛南師範学院学报』 30 (4) : 2-7
小林宏至 (2009) 「客家地区社会知識の生産和消費——福建省永定県の客家土楼与風水話語」 『客家研究輯刊』
35 : 159-165。
—— (2010) 「從族譜看客家社会与風水話語」 『贛南師範学院学报』 31-2 : 14-20。
—— (2011) 「『福建土楼』 學術表象の再思考——關於『福建土楼』 和『祠堂』 学說的分析」 『客家研究輯刊』 38 : 30-37。
謝重光 (1995) 『客家源流新探』 福建教育出版社。
—— (2008) 『客家文化述論』 中国社会科学出版社。
徐正光編 (1991) 『徘徊於族群和現實之間』 正中書局。
張維安 (2011) 「族群文化產業發展与客家文化的未来」 『客家学刊』 2 : 61-72。
周大鳴 (2005) 「動蕩中的客家族群与族群意識」 『广西民族学院学报』 27-5 : 13-21。
周建新 (2000) 「族群視野里的宗族社会——廣東豐順潮客村落的個案分析」 陳志明・張小軍・張展鴻 『傳統与變遷——華南的認同和文化』 文津出版社、147-167頁。
庄英章・高怡萍 (2009) 「全球視野中的客家研究」 『客家学刊』 1 : 94-103。

(かわい・ひろなお 国立民族学博物館・機関研究員)